

自己評価報告書(最終報告)

報告者

言語系コース(英語)
／ 数下 克彦

■平成23年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ. 学長の定める重点目標

Ⅰ-1. 教育大学教員としての授業実践

本学の目的は、豊かな教養と教育実践力をもった教員を養成し、学校現場に送り出すことにある。このことを実現するには、教科専門・教科教育・教職専門等の各分野の授業が、学校現場の実践と関連性が保たれていることが必要である。あなたは、教員養成大学の教員として、本年度はどのような授業計画を立て実現しようとするのか、これまでの取り組み状況を総括し、具体的に示して欲しい。

1. 目標・計画

○ これまでもずっと言っていることであるが、「教員採用試験合格至上主義」や「学者」教師は現場にはいないというような社会の風潮と相まって、本学の学生には、小中高の教師は教科書の教師用指導書に沿って授業をすれば事が足りるので、「高邁」な専門的知識は無用であるというような態度が見られる。私は、小中高の教科内容であっても、生徒が解るように教えるためには、その内容よりも遥かに高いレベルの専門性が必要とされることを学生に理解してもらえるような教育・授業をしていきたいと思っている。

○ 具体的には、常に、自分の授業内容項目をできるだけ小中高における教科内容に関連付けるよう心がけたり、関連する小中高の教科内容を学生に生徒が解るような説明をさせる活動を授業に取り入れる予定である。

○ さらに、成績評価において、「正解」をただ求めるような問題を避け、解答に至る思考過程を重視するような評価方法をとる。また、定期考査において、授業内容に関連する小中高の教科内容を自分だったらどのように教えるかとう問題を入れる。

○ また、学生の授業への積極的な参加を促すべく、授業中の発言など授業への積極的参加度や予習・復習などの授業外での努力なども成績評価の考慮に入れる。

2. 点検・評価

平成23年度担当した授業、「英語学研究Ⅰ」、「英語学研究Ⅲ」、「学習英文法」、「英語基礎研究」、「英語リーディングⅠ(C)」、「英語学研究Ⅲ」(以上、学部)と「英語学研究Ⅰ(英文法理論)」、「英語学研究Ⅱ(学習英文法)」(院)のすべてにおいて、授業内容を小中高における教科内容、特に、英文法(指導)に関連づけることを心掛けた。具体的には、授業内容と関連する文法項目を取り上げ、小中高の生徒にも解るような形で説明するよう受講生に求める発問、課題、テスト問題を課した。最初は、一般的に、学生はそのような設問に慣れていないため、戸惑いを示すが、次第に、小中高の内容であってもそれまでの学習者としてではなく教授者として教えるとなると、遥かに高くまた深いレベルの理解と見方が必要で、高校までの受験勉強的知識、方法論では対処することができないことに気づいていき、一見、小中高の教科内容には必要とは思われない専門的内容の重要性を理解していく傾向が見られた。この結果から、年度当初の目標を上回って実施できたということが出来る。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ-1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

ゼミ生に対する論文指導を中心に、勉学はもちろんのこと、生活、進路に関する相談、教採対策など、幅広く学生の教育・生活支援を行っていきたいと思っている。

2. 点検・評価

論文指導の合間に、教授対策として(英語による)模擬面接、作文指導、英語専門教科問題指導等を行った。生活や進路に関しても、時々相談に乗った。教採の結果は、ゼミ生二人の内、L3の学生が岡山県の高等学校英語教諭をして正式採用が決まった。もう一人のG4の学生は残念ながら一次試験不合格であった。
また、9月29日(木)には、藍住中学校で教育実習を行っているL3のゼミ生の評価授業に参加し、授業後に講評とアドバイスを行った。

Ⅱ-2. 研究

1. 目標・計画

○ 平成22年度から行っている否定辞、特に英語のnotとの比較における日本語の否定辞「～ない」の意味論的研究を引き続き行うとともにこれまでの成果を、国内外の研究発表学会、学術誌に投稿する予定である。
○ 小中高における英文法の指導の実態と問題点を研究する課題で、科学研究費補助金などの研究助成の公募に申請し、学外資金の調達に努める。

2. 点検・評価

○ 日本語と英語の否定文を比較し、日本語の否定辞「～ない」と英語のnotの意味の違いを論じた論文 Arguments Against Interpreting Japanese Negation Particle Nai as a Propositional Operator (日本語否定辞「～ない」を命題演算子と解釈することへの反論)を『鳴門英語研究』第22号に発表した。
○ 日本語の否定述語を要求する「だれも」、「なにも」型の「否定極性表現」の意味となぜ否定述語を要求するのかを分析した論文 Japanese NPI Dare-mo as Unrestricted Universal Quantifier (非制限全称量化子としての日本語否定極性表現「だれも」)が、12月1・2日に高松で開催された第8回「自然言語意味論の論理と工学」(Logic and Engineering of Natural Language Semantics (LENLS))で発表し、論文がその研究会のプロシーディングスに出版された。
○ 日本語の「だれも」は一般に否定述語を要求する「否定極性表現」と考えられているが、実は、ある種の文では肯定述語でも現れることを示し、なぜそのような振る舞いを示すのかを分析した論文 “Nonrestrictive” Universal Quantifier: the Case of Japanese Dare-mo”が、2012年3月19-20日にシュツットガルト大学(ドイツ)で開催された国際ワークショップ Semantic and Pragmatic Properties of (Non)Restrictivity ((非)制限性の意味論ならびに語用論的特性)の口頭発表に採択され、発表を行った。
○ 科研費の申請は、残念ながら準備が間に合わず見送ることにした。

Ⅱ-3. 大学運営

1. 目標・計画

昨年度に引き続き、大学院入試委員会委員としての業務を中心に大学運営に貢献する。

2. 点検・評価

大学院入試委員会委員として、特に、言語系コース(英語)の定員充足を図るための施策を中心に入試業務を真摯に行った。ならびに、大学院入試委員会副委員長として、本大学院全体の入試業務のスムーズな運営に努力した。

Ⅱ-4. 附属学校・社会との連携、国際交流等

1. 目標・計画

- ① 授業(「教科教育実践」、研究授業)などの機会に、附属学校教員との交流を深め、共同研究の環境づくりに務める。(附属学校)
- ② 大学と地域・社会また留学生との交流、相互理解を図りたい。(社会連携、国際貢献)

2. 点検・評価

- 「初等中等教育実践I(英語)」で、受講生を附属小学校に引率した折、外国語活動担当教諭の一人である長野教諭と小学校英語活動に関して意見交換を行った。
- 学期中、毎週木曜日夜6時から、伊東治己教授とテニスを主催している。毎回、日本人学生、留学生、地元の中学校で英語指導助手を務める外国人などが参加し、リラックスした雰囲気の中、国際交流を実践している。
- 時折、留学生をポットラック(食べ物持ち寄り)カラオケパーティーに招待し、カラオケを楽しむだけでなく、日本のこと、彼らの国のこと、修学・生活上の困り事などを気楽に話す機会を設けている。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

- 「大学運営」の内容の繰り返しになるが、今年度、大学入試委員会副委員長の任務を真摯に遂行し、今年度の大学院入試業務の運営に貢献できたと思っている。
- 審査ありの二つの国際研究大会で口頭発表を行い、本学の知名度向上のために貢献したと思っている。